

# ロード LODE

に取組んでみませんか？



生きる力を育む研究会では、これまで、協力団体との連携体制によってLODEを進めてまいりましたが、今後は窓口をわかりやすくするために **NPO法人LODE JAPAN(ロードジャパン)** を設立する予定です。この法人では、全国の活動団体の支援を行います。

また、地域福祉・防災活動に取り組んでいらっしゃる個人(コミュニティワーカーや民生児童委員、自治会リーダーや災害ボランティアなどの地域リーダーの方など)を支援するために、またLODESTARチャートの内容に関心をお持ちの方への情報提供や活動支援を行うための研究機関 **NPO法人LODESTAR(ロードスター)** も同時期に設立する予定です。LODESTARとは、「道しるべの星」、即ち北極星を意味する言葉です。そしてSTARには星、地域で黒子として活躍する方々こそ“地上の星”であるという意味をこめています。

LODE及びLODESTARに関する情報や各種ご案内は、今後ホームページ(URL: <https://lodestar-jp.jimdo.com>)にてお知らせいたします。

**NPO法人LODE JAPAN(設立準備中)**

**NPO法人LODESTAR(設立準備中)**

連絡先・お問い合わせ先

E-mail:[lodestar\\_jp@yahoo.co.jp](mailto:lodestar_jp@yahoo.co.jp)

URL:<https://lodestar-jp.jimdo.com>

右のQRコードからもアクセスできます。

電話:090-2705-0570 または 090-3898-9421



この冊子は平成28年度JR西日本あんしん社会財団の助成を受けて作成しました。

# Little people Old people Disabled people's Evacuation

小さき者も

老いたる者も

障害を抱える者も

みんなで避難しよう

みんなで生きて行ける

社会をつくろう



普段から社会的弱者を見守るための  
コミュニティ生成型防災事業の実践



# ロード LODE

に取組んでみませんか？



2017年3月 生きる力を育む研究会

この冊子は平成28年度JR西日本あんしん社会財団の助成を受けて作成しました。



これまで都市部では、コミュニティ(見守り力)の弱さから高齢者の孤独死がみられるなど多くの問題が指摘されてきましたが、個人情報守秘の風潮等から「コミュニティ自らの手による見守り体制構築」に決め手となる策を講じることができませんでした。しかし現在、都市部住民を動かす可能性を持つ“新たな動機”が出現しています。それは南海トラフなど今後想定される大震災への防災対策問題です。

これまで福祉と防災は縦割り弊害から十分な連携が図られていませんでしたが、今こそ“防災”を切り口に平時の見守り体制構築に取り組むことが喫緊の課題と言えます。

研究者、福祉・防災・教育・子育て実務者等から成る当研究会では、25年度に「弱者見守り型災害図上訓練ワークショップLODE (ロード)」方式という防災と福祉をつなぐワークショップ方法を開発しました。これに対して伊丹市の社会福祉協議会や神戸市の大規模マンションからは「要援護者見守り体制づくりに活用したい」という声が寄せられました。また大阪市内の社会福祉協議会からも取組みたいという要望が寄せられました。

この事業は、コミュニティが脆弱な都市部地域で、LODEワークショップを開催し、その方式を当該地域に根付かせるとともに、そこでのコミュニティの強化を目指すものです。

LODEは、L(Little people)、O(Old people)、D(Disabled people)、E(Evacuation)の頭文字をつないだもので、弱者の避難を一番考えるべきだという考え方がこめられています。加えてLODEとは、“鉱脈”の意味も有しますが、既に全国的に普及しているDIG(ディグ:災害図上訓練)が持つ“掘削”の結果発見された宝物という意味も込められています。

かつてのDIGも、今回のLODEも、本会のメンバーであり平成22年度防災大臣表彰受賞者である南部美智代等が開発した手法ですが、本研究会では今年度の取り組みを通して、この新しい手法LODEをさらに利用価値の高いものへと向上させることにも取り組みました。

その結果、曼荼羅の構図を生かしたリーダー育成ツール、『LODESTAR(ロードスター)チャート』を考案しました。LODEとLODESTARが、これからのコミュニティ防災・福祉力の向上に貢献できることを願っています。

2017年3月

生きる力を育む研究会

代表幹事 藤本 真由



## LODEの特徴:従来手法との違い

### (1) 図上作業手法としての特徴

- ・戸建住宅地区だけでなく都市型中高層住宅地区にも対応を考えます。
- ・地域の危険箇所だけでなく、住民の持つ脆弱性(支援を必要とする方々)の存在に着目します。

### (2) 要援護者支援を目指す手法

- ・災害で犠牲になりやすい方々への理解と支援を目指します。
- ・子ども、高齢者、障害者の存在情報収集だけでなく、それらの方々に対する理解の向上を目指します。(認知症や発達障害・精神障害等の特徴を理解していない地域リーダーが、本当に役立つ避難所運営ワークショップを行うことができるでしょうか?)

### (3) Evacuation(エバキューエーション:発災時避難)と Sheltering(シェルタリング:避難生活)両方への対応を考える手法

- ・従来は、発災時避難への対応だけを考えた手法、避難所運営だけを考えた手法が中心でしたが、LODEはその何れもが不可欠だと考えています。
- ・そして従来の手法に不足しているのが、「要援護者の方々への発災時避難行動支援、避難生活支援に求められる理解」であると感じています。

### (4) 災害時対応ばかりでなく日常に生かすことのできる手法

- ・LODEワークショップを通して、要援護者に対する住民の理解を促進することは、日頃の地域見守り力増強につながります。

### (5) バラバラなコミュニティをつなぐために活用できる手法

- ・多くの地域では、自治会・町内会コミュニティ、PTA、子供会、高齢者を抱える世帯、障がい者を抱える世帯等が有機的につながっていません。
- ・LODEでは「基本LODE(自治会など)」、「子どもLODE」、「つなぎLODE」などを駆使して、バラバラなコミュニティの結びつきを仕掛けます。

### (6) 地域リーダー・コーディネーターを育成するLODESTARチャート

- ・LODEは、社協のコミュニティワーカーや民生委員、自治会のリーダー、そして災害ボランティアの方々等によって“地域の中で”、“上から目線ではなく水平目線で”すすめる手法です。
- ・LODEでは推進者の方々を支援するために『LODESTARチャート』を作成しています。

# LODEワークショップの企画と準備

## 1 「どこでやるか?」、「目的は?」を決める

どこでやるか(対象)	目的・狙い
小学校区や連合自治会	LODEの導入や各種団体のつなぎ
自治会・町内会の単位	基本的なLODE
マンション・中高層住宅団地	基本的なLODE
子ども会や学校のクラス・学年	子どもLODE
高齢者施設や障害者施設	状況に合わせたアレンジが必要

## 2 企画・案内をする

### ◆日時と会場

- ・ワークショップは2時間くらいまでがちょうどいいと思われます(90分~150分まで)。
- ・対象が子どもの場合は1時間くらいが限界かもしれません(45分~90分まで)。
- ・図上ワークショップの場合、グループ・班別にテーブル(島)を設置し、各島の図面の周りをそれぞれのグループ班員5~10名が囲んで作業できる広さが必要です。

### ◆必要な設備

- ・各島を形成するテーブル
- ・マイク(全体ファシリテーター用、テーブルへのインタビュー・発表用)
- ・ホワイトボード(進行の内容や意見の要約を板書します)
- ・できればプロジェクターとスクリーン(説明は画像や映像を使うことが効率的です)

### ◆案内

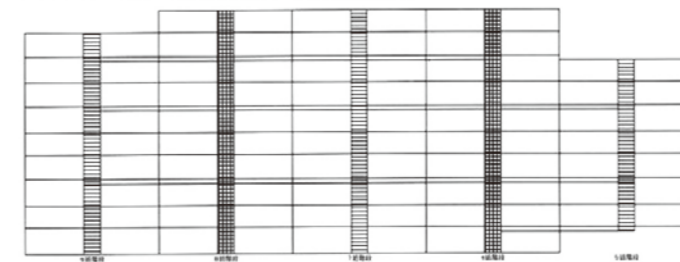
- ・参加者を募る場合は2~3ヶ月前の案内と2週間前の案内の最低2回の案内が必要だと思われます。

## 3 当日までに準備するもの

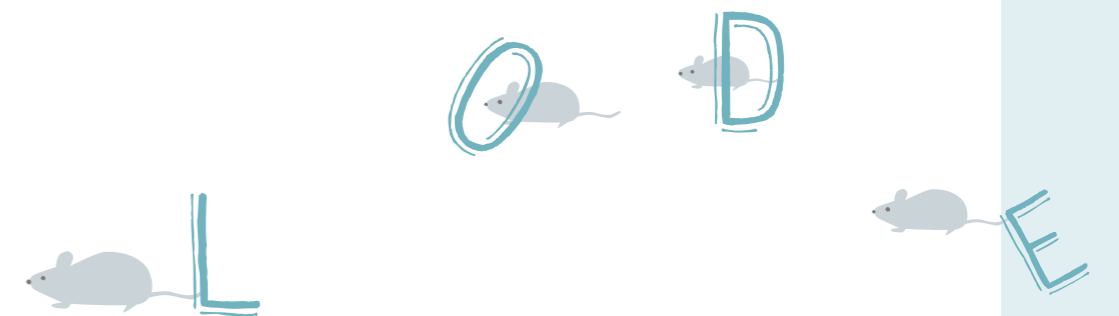
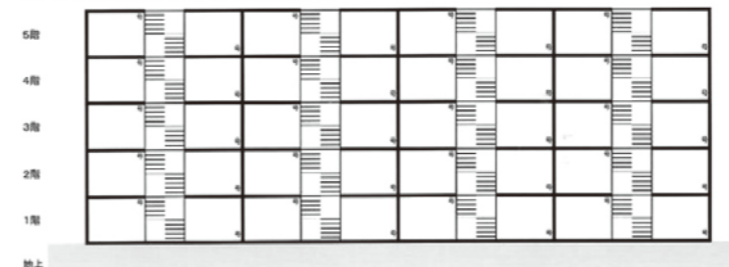
### ◆ワークショップに利用する図面

- ・対象が自治会の場合には、戸建住宅が主な地区ならば、コンビニの「住宅地図プリントサービス(有料)」を利用して、対象エリアの住宅地図をプリントアウトして貼り合わせてください。
- ・対象がマンションなどの中高層住宅の場合には、エクセルで住棟単位の簡易な戸割の立面模式図を作成してください。それをAゼロ版などの大きな紙面に出力します(大型のプリンターは役所や社協などに備えられていることが多いので、協力を要請してください。また民間でも1枚千円程度で出力してくれるお店があります)。

【立面型住戸配置図の例】分譲マンションエレベータ2基、階段5カ所タイプ



【立面型住戸配置図の例】公営住宅団地階段4カ所タイプ



# LODE ワークショップの基本的な進め方

標準的な進め方をご説明します(1回で全てできない場合には2回に分けて開催することも可能です)

## 1【受付、着席】

・最初に飲み物や軽食を用意しておくことも有効です。飲食には、緊張がほぐれ会話が進みやすいという効果が期待できます。

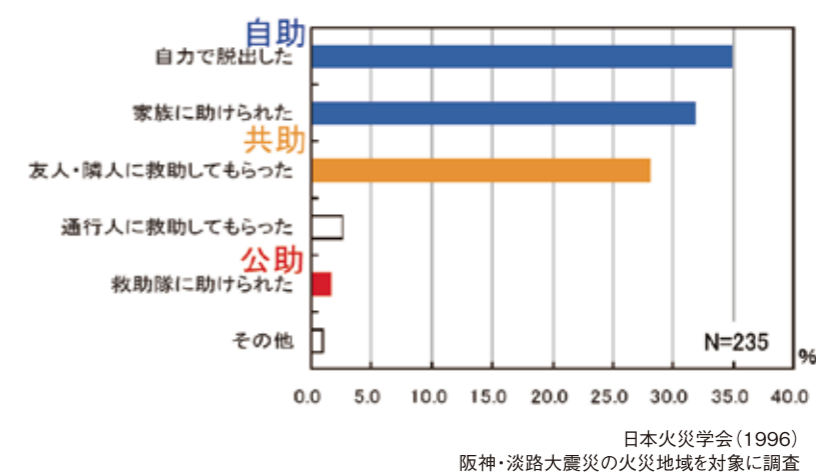
## 2【挨拶・導入、進め方の説明:5分~10分】

・住民はあまり長い挨拶を求めています。手短に必要性、目的を語ってください。  
・進め方やテーブル上にある図面、シール、凡例表などをわかりやすく示してください。

## 3【ウォーミングアップ1「自助・互助について考えてもらう」:2~5分】

・なぜ自助が、互助・共助が重要かをファシリテーターから説明します。(パワーポイント利用が有効です)

生き埋め・閉じ込められた際の救助



## 4【ウォーミングアップ2「あなたにとっての災害時三種の神器とは?」:10分~15分】

・東日本大震災時、東北被災地の避難所では、入れ歯を持って来られずに乾パンなどの硬い非常食を食べられない高齢者が続出しました。咀嚼できないことは栄養不足だけでなく、認知症につながると言われます。また眼鏡を忘れた人は視覚障害者と同じような要支援状態に陥りやすく、さらに補聴器を忘れた人は聴覚障害者となってしまいました。

・ファシリテーターからこのことを説明した上で、「あなたにとって命を繋ぐ大切なもの、大切なこと(即ち災害時三種の神器)は」という質問を出して、各自ポストイットに書いてもらいます。

・ポストイットに書かれた意見を模造紙上に貼り出し、カテゴライズして整理し、全員に向けて発表します。

## ◆凡例表と凡例シール

### 【凡例表の一例】

<p>1. WS参加者の自宅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★金色星印</li> </ul>	<p>3. 支援が必要な方のシール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●銀丸：身体的な支援が必要(身体障害、病気、妊婦さんなど)</li> </ul>
<p>2. 年代シール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●赤丸：後期高齢者(75歳~)</li> <li>●紫丸：前期高齢者(65~74歳)</li> <li>●橙丸：赤ちゃん(0歳児)</li> <li>●黄丸：幼児(1歳~6歳)</li> <li>●水丸：小学生(7歳~12歳)</li> <li>●青丸：中高生(13歳~18歳)</li> <li>●緑丸：その他の住民(19歳~65歳)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●金丸：コミュニケーションが心配(認知症、知的障害、精神障害、引きこもり、虐待、外国人など)</li> </ul>

凡例は、地域の特性や必要性に応じて工夫する必要があります。  
前期高齢者の凡例を設けず、「消費者被害に遭った高齢者」の凡例を設けた地域や、「犬を飼っている家」、「猫のいる家」などの凡例を設けた地域もあります。

### 【凡例シール】

・百元ショップやホームセンターで安価に入手できるものを活用してください。



## ◆その他文具類

- ・付箋(ポストイット)・・・参加者1人あたり数枚(できれば色も数種類用意)
- ・模造紙・・・付箋に書いてもらった意見などを貼って整理します
- ・ラッシュンペン・・・付箋に意見を書いてもらう時に使います
- ・カラーマジックペン・・・図上で避難行動シミュレーションなどを行う際の記述用に使います。



## LODE ワークショップの基本的な進め方

2

### 5【要援護者についての事前学習:10分~15分】

・要援護者に対する理解を促すことがLODEワークショップでは重要な目的の一つです。住民の中に、認知症に対する初歩的・基本的理解や、各種障がいの特徴に関する初歩的・基本的な理解が進んでいけば、そのコミュニティは日常時から“見守り力のある福祉コミュニティ”へと育つはず。

・どのような在宅の要援護者が地域にいるか、そうした説明は社会福祉協議会職員や行政の福祉担当者に協力を求めてください。

・以下は説明資料の一例です。

### L : Little People (子ども)

- 橙色シール : 赤ちゃん
- 黄色シール : 未就学年代の幼児
- 水色シール : 小学生
- 青色シール : 中・高校生

#### ※「発達障害児」という問題

ASD 自閉症スペクトラム Autistic Spectrum Disorder	★ 自閉症 ★ 知能は高いが自閉気味で対人関係やコミュニケーションに問題	● 文科省調査では推定60万人(児童生徒の6.5%) ● 幼児まで含めると100万人(人口千人当たり8人) ● グレーゾーンまで含めるとさらに増加
ADHD 注意欠陥多動障害 Attention Deficit Hyperactivity Disorder	★ 注意力欠如 ★ 衝動性 ★ 多動	
学習障害 Learning Disabilities	特定分野の学習に困難を抱える	

### O : Old People (高齢な方々)

- 紫色シール : 前期高齢者 (65歳~74歳)
- 赤色シール : 後期高齢者 (75歳以上)

- ・ 在宅で要介護・要支援の方々
- ・ 要介護・要支援ではないが、“予備軍”だと思われる方々
- ・ 運動 (1年以内に転んだ、15分以上歩けない、何かにつかまらないうと立てない)
- ・ 口腔 (硬いものが食べにくい、お茶を飲んでむせる)
- ・ 栄養 (体重が半年で2~3kg減った)
- ・ 閉じこもり (週に1回も外出しない)、うつ
- ・ 認知症 (認知症予備軍は相当多数に上るとされる)

認知症は避難所生活での最大の課題となる

## LODE ワークショップの基本的な進め方

3

### D : Disabled People (障がいをもつ方々)

- 銀色シール : 身体的な支援や配慮が必要な人
- 金色シール : コミュニケーション面で支援や配慮が必要な人

#### ● 身体障害

- ・ 視覚
- ・ 聴覚・平衡機能
- ・ 音声・言語・咀嚼
- ・ 肢体不自由
- ・ 内部 (人工透析、人工肛門、酸素ボンベ等)

高齢者三種の神器の持つ意味  
【災害時にわか障がい者を減らす】

#### ● 知的障害

- 精神障害 (人口千人当たり約22人が在宅)

### その他災害時対応が求められる要援護者の一例

- ・ 難病 (特定疾患) の方
- ・ 人工透析や酸素療法を受けている方
- ・ てんかん患者の方
- ・ IDDM : 1型糖尿病の方
- ・ その他慢性疾患の方 (医薬品確保等が必要な方)
- ・ アレルギー性疾患への対応が必要な方 (喘息の他、食事、動物等)

- ・ 外国人 (日本語が不自由な方)
- ・ 虐待が疑われる家族
- ・ ペット



# LODE ワークショップの基本的な進め方

## 4

### 6【凡例の説明とシールの貼り方の説明:5分】

- ・凡例表に従って説明していきます。
- ・各凡例毎に「説明→シール貼りを行う」か、あるいは「全ての凡例を説明→シール貼り作業も一気に行う」かは、参加者の人数や特性によっても変わってきますが、通常的人数であれば後者がやりやすいのではないかと思います。

### 7【シール貼り作業:30分～40分(コミュニティの大きさによる)】

- ・ただシールを黙々と貼るのでは意味が半減します。「あそこのおばあちゃん、最近見ないけど具合悪いの?」、「おばあちゃん、要支援になってデイに通っているから最近地区の会合に顔を見せなくなっているのよ」、「あそこのご主人は退院されたいけどまだ療養中で歩くのが辛いわ」というような自然な情報交換が住民間で行われ、それを共有し始めること、それが重要なのです。
- ・また「お助けタイム」と称して、異なる班と班が情報交換する時間を確保します。



### 8【班別作業結果の発表と要援護者総括表作成:10分～15分】

- ・各班から貼ったシールの数を種別に報告してもらい、それを集計した表をホワイトボードや模造紙上で作成します。
- ・自分たちがシールを貼った図で要援護者の存在を視覚的に理解し、一方で、集計表で数的にも把握する。
- ・これらの作業を毎年1回実施しているマンションコミュニティ(170世帯)では、ワークショップ参加住民たちがすべての住戸の表札(姓)を図に書き入れられるほどになりました(3年目でそこまでできるようになっています)。

住戸No.	身体の不自由	要援護者の不自由	その他	合計
A-100	0	1	4	20
A-200	0	1	0	6
B-100	0	2	4	23
B-200	0	1	4	35
計	0	4	9	84

# LODE ワークショップの基本的な進め方

## 5

### 9【避難行動時や避難生活時の要援護者支援計画検討:15分～20分】

- ・図上ワークショップでシールを貼った要援護者と目される方々の避難行動時や避難生活時に求められる支援の内容、必要な人数、必要なスペースや物資、さらには誰が支援をなどについて検討を行います。
- ・この作業は第1回目のLODEワークショップではなかなか難しいかもしれませんが、2回目あるいは3回目に挑戦したい作業です。この作業を経てこそ「避難訓練」などもより意味を持つてくるのです。
- ・ここで大事なのは、支援は「緊急避難行動」と「避難生活」の両面で考えなければならないということです。

避難行動支援計画シート(震災の想定【災害の内容: 】【震災の日時: 】)

住戸 No.	要援護者のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなる人は?
	身体の不自由 ( ) 要援護者の不自由 ( ) その他 ( )	自宅避難 水平避難 垂直避難(上の階へ) 垂直避難(下の階へ) 外部への避難 ( )			
	身体の不自由 ( ) 要援護者の不自由 ( ) その他 ( )	自宅避難 水平避難 垂直避難(上の階へ) 垂直避難(下の階へ) 外部への避難 ( )			
	身体の不自由 ( ) 要援護者の不自由 ( ) その他 ( )	自宅避難 水平避難 垂直避難(上の階へ) 垂直避難(下の階へ) 外部への避難 ( )			

避難生活支援計画シート(震災の想定【災害の内容と復旧までの想定期間: 】)

住戸 No.	要援護者のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなる人は?
	身体の不自由 ( ) 要援護者の不自由 ( ) その他 ( )	自宅避難 公的避難所 (指定場所) その他必要な場所 ( )			
	身体の不自由 ( ) 要援護者の不自由 ( ) その他 ( )	自宅避難 公的避難所 (指定場所) その他必要な場所 ( )			
	身体の不自由 ( ) 要援護者の不自由 ( ) その他 ( )	自宅避難 公的避難所 (指定場所) その他必要な場所 ( )			



## その他のLODEワークショップ

### ◆「5年後」LODE

- ・2回目以降のワークショップに有効な発展版です。
- ・まず、現在のコミュニティの住民の状況をシールで貼ります(ここまでは前ページまでに説明したワークショップの方法で進めます)。
- ・作業した図面の上に透明なビニールシートを被せます。
- ・「今の住民たちがそっくりそのまま残っているとして、5年後の状況をシールで貼ってください」という条件の下に、ビニールシートの上から凡例シールを貼ってもらいます。
- ・前期高齢者から後期高齢者へと変わる者が発見されます。
- ・また後期高齢者の中にも「超後期高齢者(85歳以上:ピンクの丸印シール)へと変わる者が増えることに気がつきます。
- ・福祉課題が重くなるだけではありません。新しい人的資源の気づきにもつながります。幼児が小学生に、小学生が中高生になり、新しい担い手候補が存在することに気がつきます。
- ・それが理解できると、コミュニティでは「子どもLODEで子供を育てよう」という目標ができます。

「5年後」LODEのイメージ



「5年後のコミュニティ」のシミュレーション作業



### ◆子どもLODE

- ・現代の小学生(中高学年)の中には、自宅の住所や電話番号を覚えていない(中には父親の名前も正確に言えない)子供が少なくありません。
- ・現代の小学生は、集中力が欠如気味で、映像や画像を用いた進め方をしないと惹きつけられない傾向があります。
- ・こうした課題を踏まえて「子どもLODE」を企画・実施します。



## 地域のリーダーやコーディネーターを育成するために『LODE活用支援ツールLODESTAR(ロードスター)チャート』を活用してみませんか？

LODEでは、防災・福祉コミュニティを紡ぐために重要な8つの視点を整理しました。ご自分たちのコミュニティを見直してみませんか。

### 【LODESTAR(ロードスター)とは】

- LODESTARは「道しるべの星」、即ち北極星を意味する言葉です。LODESTARは昔から旅や航海の道しるべでした。
- LODEプログラムにおけるLODESTARは、地域でリーダーやコーディネーター、黒子として活躍する方々(いわゆる「地上の星」の皆さん)のこと(LODEの星)であり、皆さんのガイド役・道しるべ役となるチェックポイントや活動目標であると考えています。

### 【LODE活用支援ツールとは】

- LODEは「マップづくり」で終わってしまうと、意味が半減してしまいます。
- LODEは地域防災・福祉コミュニティを紡ぎ直すために、「要援護者の支援に力点を置いたマップづくり」と、それをきっかけに取り組み「一連のコミュニティづくり活動」を支援する総合的な手法です。
- 他の手法に見られるように、災害時避難行動支援だけを、或いは避難所運営だけを考えた手法ではありません。
- そこでLODEでは、地域のコミュニティリーダー(自治会リーダー、社協のコミュニティワーカー、民生委員など)の皆様にも、より効果的にLODEを活用していただけるように、LODE実施・展開において力点を置いたり留意して取り組んでいただきたい取組み目標の項目を『項目別取組み目標兼到達度チェックチャート図』に整理いたしました。
- また、それらの取組み目標を設定した背景や狙い、取組みにおけるポイントなどを表に記述整理した『項目別取組み目標兼到達度チェック表』も作成いたしました。
- これらの整理・作成にあたっては、実際にLODEを活用して取り組みを開始した複数の現場(兵庫県伊丹市、神戸市灘区、大阪市北区、広島県安佐北区、京都府精華町、三重県鈴鹿市など)の現場コーディネーターやリーダーの皆様にも、それぞれの現場から得られる成果や課題について多くのご意見をうかがいました。
- これから防災・福祉コミュニティづくりに取り組もうとお考えの皆様にも、是非LODEのマップづくりとともにこのチャート図とチェック表をご活用いただきたいと思います。



LODE活用支援ツール・ファシリテータ養成支援ツール

# LODESTAR チャート

段階別・項目別取組み目標兼到達度チェックチャート図)

防災・福祉コミュニティを紡ぐために重要な8つの視点を、  
曼荼羅の構図を生かしたチャート図にまとめてみました。

地区や目的に合わせた図面使用	作業班内における会話促進の工夫をする	要援護者への認識を深めるための学習をする	地域の在宅要介護高齢者情報を収集する	地域の介護予備軍高齢者の情報を収集する	高齢者が避難できる場所の調査・計画を行う	普及者候補にはLODEを他者に伝えてもらう	社協職員はコーディネータ役となる	自分たちでWSの企画と運営を行う
個人情報の管理に留意する	図面WS	コミュニティ力を養うためのWSの定例化を図る	地域の在宅要支援高齢者情報を収集する	○	要援護高齢者の自主的申告を促す	説明・説得・行動力のある人材を見つける	育成	講師・ファシリテータ役をしてもらう
凡例は状況に応じて工夫する	要援護者・支援者情報収集	基本単位は単位自治会で行う	基本コミュニティ単位でLODE WSを行う	高齢者への認識・理解を深める学習をする	高齢者参加によるWSや避難訓練を行う	導入LODE予備LODE講習会から始める	普及者育成支援ツールを活用する	人材育成の核となる関係機関参画体制を作る
言葉だけでなく視覚からの伝達を心がける	子ども自身が住所や電話番号を言える	子ども会や学校単位でWSを行う	図面WS	○	育成	避難訓練の定例化を図る	歴史や被災経験から学ぶ	要援護者らの抱える困難を認識・理解させる
WSは体験・共同作業重視で行う	L	大人が子どものことを知るための努力をする	L	コミュニティの紡ぎ直し	E	必要物資を考える・準備する	E	避難行動時のリスクや困難を想像させる
WS班作業は小地区や通学路単位で行う	親や地域の大人を引き込む	様々な子どもが一同に参加する	繋ぎ協働	D	体験	私設避難所のニーズと候補を考える	エトランゼへの対応を考える	避難所生活のリスクや困難を想像させる
世代をつなぐ(大人と子ども)	WSや訓練の場で参加者同士をつなぐ	井戸端サロン型活動をつなぐ	障害者・家族の自主的申告を促す	地域の重度障害者情報を収集する	障害者が避難できる場所の調査・計画を行う	他の世代や外国人との交流を体験してもらう	逃げること(緊急避難行動)を体験してもらう	避難所生活の模擬体験をしてもらう
エリアをつなぐ(小学校区で)	繋ぎ協働	物資備蓄や私設避難所づくりをとおしてつなぐ	地域の在宅身障者情報を収集する	D	障害者参加によるWSや避難訓練を行う	みんなの前で発言する体験をもらう	体験	炊出し体験(作る、食べる)をしてもらう
つながりの軸・核となる体制を作る	要援護者と地域住民をつなぐ	地域の事業者と住民をつなぐ	障害者への認識・理解を深める学習をする	地域の知・精・発各障害者情報を収集する	家族の理解を得られる進め方を工夫する	防災機器等の操作・使用体験をもらう	防災グッズなどの共同制作体験をもらう	まち歩きによる共同確認作業体験をしてもらう

項目別取組み目標兼到達度チェック表

：子どもを守るための8つの取組み目標

取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
子ども自身が住所や電話番号を言えるようにする(震災迷子・犠牲を防ぐ)	●「親の氏名・住所・電話番号」テストの実施と、結果速報の発表と表彰。震災迷子にならない能力、これは子どもの自助力の基本と考える。 ●結果を親に知らせる(「小学生の大半が住所・電話番号を覚えていない」という状況を理解できていない大人が大半であると思われる)。
親や地域の大人を引き込む	●自治会への参加度が低い30代～40代の世代を、地域防災活動に引き込むためには、子どもの安全安心やその活動に関心をもってもらう必要がある。そのために、次のような手立てを講じることが有効であろう。 ・PTA(親)対象のLODEワークショップを実施してみる ・親子で一緒に共同作業できるメニューの導入(ストローハウス制作、まち歩き・確認のための図上ワークショップ)
大人が子どものことを知るための努力をする	●大人たちは、自分が子どもだった頃を思い出して、今の子どもを理解したつもりである。しかし、環境変化に伴い、現代の子どもたちは変化してきている。 ●まず、大人は今の子どもについて理解しておく必要がある。また、昨今増加しつつある発達障害についても理解が必要である。 ●子どもの理解や発達障害の理解に関しては、要支援者(子ども)についての説明資料・説明パワポを利用する。 ●子どものワークショップなど、取組みの現場を実際に見てもらい、理解につなげてもらう。
子ども会や学校単位でWSを行う	●小学校区単位で取り組める地区子ども会等でのLODEワークショップを実施する。 ●学校主催での実施の場合、教員の認識・意識の不足が懸念される(横並びを意識しすぎる)が、釜石東中学校の事例もあるので有効な場合もある。実施の場合は予定調和にならない工夫を講じる。
WS班作業は小地区や通学路単位で行う	●ワークショップにおけるグループワークは、学校区内の小地区別の班単位で行う(集団登下校の場合にも有効)。 ●図面を使用するワークショップの場合は、次のような情報を図示させる。 ・自宅、学校、避難所、公衆電話、医療機関の凡例 ・交通機関や道路の図示、災害時ハザードの図示 ・通学路や避難路の図示 ・気になる人(お友達、乳幼児、高齢者、障害者) ・犬や猫(ペット同行避難の問題を理解してもらう)
言葉だけでなく視覚からの伝達を心がける	●昔の子どもと比較して、現代の子どもは会話によるコミュニケーション力が弱い(現役教員の声)。話し言葉だけでなく説諭しても伝わらない場合も懸念される。絵(イラスト)、画像、映像などを活用して伝える工夫が求められる。
WSは体験・共同作業重視で行う	●現代の子どもたちはゲームの影響か、複数人で一緒に取り組む機会が十分ではないといえる。班単位作業を導入し、例えば次のような共同作業や制作体験をさせる。 ・地図をもとにまち歩きで確認させる。(トランシーバーの扱い方を教えて、まち歩きで利用させる。災害時危険箇所の確認。私設避難所候補の確認。友達同士の自宅場所確認。デジカメを持たせて即時プリントアウト) ・ほのぼの灯りづくりと灯りイベント ・新聞スリッパの制作 ・高齢者三種の神器箱制作 ・ストローハウス制作ワークショップ ・家庭へのお手紙(参加報告)を書かせる
様々な子どもが一同に参加する	●軽度であれば特別支援学級の発達障害や知的障害の子どもと一緒に取り組む。災害時は、通常学級の子どもも特別支援学級の子どもと一緒に避難するケースが考えられる。一緒に取り組むことで「自分とは少し違う存在」を認める気持ちを養う。



## 項目別取組み目標兼到達度チェック表

○ : 高齢者を守るための8つの取組み目標

取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
高齢者への認識・理解を深める学習をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>●高齢者が抱える要介護状態や認知症に対する市民の理解は必ずしも十分ではない。住民の高齢者に対する認識度・理解度を上げるための学習が重要である。</li> <li>-要支援者についての説明資料・説明パワポを活用して理解を促進する。</li> <li>-場合によっては、認知症度の簡易テストなども実施して体感による理解を促す。</li> </ul>
地域の在宅要介護高齢者情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●在宅要介護高齢者は、介護事業者が抱え込み、地域との交流が少なくなるので、情報収集も難しい。社協、民生委員と連携しながら、ケアマネ事業所などとの連携を図るべく、折衝を試みる(発災時避難に関する連携)。</li> </ul>
地域の在宅要支援高齢者情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●在宅要支援高齢者についても、徐々に介護事業者が抱え込む対象となっていく。地域との交流が少なくなり始めるので、情報収集も難しい。社協、民生委員、地域包括支援センター等と連携しながら、介護支援事業者などとの連携を図るべく、折衝を試みる(発災時避難に関する連携及び普段の地域活動への参加支援)。</li> </ul>
地域の介護予備軍高齢者の情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●介護予防以前であるが、介護予備軍、認知症予備軍といわれる高齢者たちの存在が問題である。その中には引きこもり状態で、地域と交流の減った高齢者も少なくない。防災上は、ある意味、要支援や要介護高齢者より問題を抱えているといえる。</li> <li>●この問題に対し有効な手立ては、女性たちを中心とする近所の“柔らかな情報ネットワーク”である。次のような井戸端サロン活動等が有効であると考えられる。</li> <li>-縁側サミット(鈴鹿市寺家の事例)</li> <li>-ご近所ネットワーク(伊丹市などの事例)</li> </ul>
基本コミュニティ単位でLODE WSを行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>●単位町内会(単位自治会、マンション自治会など)で実施するLODEワークショップには、元気な高齢者の参加が多いと思われる。元気な高齢者の情報は、ここでおさえる。</li> </ul>
要支援高齢者の自主的申告を促す	<ul style="list-style-type: none"> <li>●LODEは、一方的な関係(支援者側だけに支援する意識があり、要支援者側は無関心・無認識という関係)では効果が半減してしまう。支援される側が、「災害時に私を支援してほしい」という意思表示が重要である。この意思表示は個人情報取り扱いの問題においても大きな力となる。</li> <li>●これを取り付けるためには、各戸へのアンケート調査、さらにはヒアリング訪問などから着手することが考えられる。</li> </ul>
高齢者参加によるWSや避難訓練を行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>●元気な高齢者だけではなく、「要介護高齢者」、「要支援高齢者」が参加してのWSや防災訓練が重要である。</li> <li>しかし、実現するためには、本人や家族の意思によることが求められる。</li> <li>●アンケート調査や訪問ヒアリング調査など地道なコミュニケーションを重ねていくことが重要と考えられる。</li> </ul>
高齢者が避難できる場所の調査・計画を行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>●大規模震災発生後などにおいては、要支援・要介護及び予備軍と目される高齢者が、一般の避難所で避難生活することは難しい(QOLの急激な低下等が問題視されている)。老人ホームなどの施設が緊急的な受け入れをするケースも想定されるが、そのキャパシティは十分ではないと思われる。</li> <li>●そこで、空き家などを活用した『私設福祉避難所』の設置が不可欠と考えられる。LODEプロジェクトにおいては、現在、平時の介護機能付き住居として宮崎市などで空き家を活用して展開されている『かあさんの家』に着目し、そのスタイル(空き家利用)を災害時の私設福祉避難場所としてアレンジする案を各地域で検討していくことを提案する。</li> </ul>

## 項目別取組み目標兼到達度チェック表

D : 障害者を守るための8つの取組み目標

取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
障害者への認識・理解を深める学習をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>●障害者への支援は「理解に始まり理解に終わる」。</li> <li>●概略に関しては、要支援者についての説明資料・説明パワポを利用。</li> <li>●しかし、より深い理解は、実際の障害者の方々と接する機会を数多く確保しないと難しい。</li> </ul>
地域の在宅身障者情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●在宅の身体障害者は、比較的情報を得やすい(意思表示・確認しやすい)。</li> <li>●図面ワークショップで収集した情報に満足せず、本人及び家族から必要な支援について聞かせてもらうことが重要である(アンケートやヒアリング調査など地道なコミュニケーションを重ねる)。</li> </ul>
地域の重度障害者情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自治会などのコミュニティでは十分な情報が入手しづらい。まずは地域の施設に訪問し、職員から状況を説明してもらう(調査)。</li> <li>●災害時対応などに関して利用者家族の話を聞かせてもらう。</li> <li>●その上で、可能な場合には、利用者家族にも災害時対応などに関しての話を聞かせてもらう。</li> </ul>
地域の知・精・発各障害者情報を収集する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自治会などのコミュニティでは十分な情報が入手しづらい。まずは地域の施設に訪問し、職員から状況を説明してもらう(調査)。</li> <li>●災害時対応などに関して利用者家族の話を聞かせてもらう。</li> <li>●その上で、可能な場合には、利用者家族にも災害時対応などに関しての話を聞かせてもらう。</li> </ul>
家族の理解を得られる進め方を工夫する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●発達障害に関して、学説では遺伝の影響は否定されているが、現場職員からは「発達障害の子どもを持つ親にも発達障害傾向が強い親が少なくない」という声が上がります。加えて親の中には、我が子を障害だと認めたくない親も少なくない。</li> <li>●よって、障害者家族に対する調査やワークショップ、訓練などへの参加呼びかけは、急ぐべきではない。徐々に調査やコミュニケーションの回数を重ね、家族の信頼を得ながらの形で進めるべきである。</li> </ul>
障害者・家族の自主的申告を促す	<ul style="list-style-type: none"> <li>●LODEは、一方的な関係(支援者側だけに支援する意識があり、要支援者側は無関心・無認識という関係)では効果が半減してしまう。支援される側が、「災害時に私を支援してほしい」という意思表示が重要である。この意思表示は個人情報取り扱いの問題においても大きな力となる。</li> <li>●これを取り付けるためには、各戸へのアンケート調査、さらにはヒアリング訪問などから着手することが考えられるが、身障者以外の知的障害、精神障害、発達障害を持つ障害者の家族にアプローチすることは容易ではない。</li> </ul>
障害者参加によるWSや避難訓練を行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>●本来は障害者本人及び家族が参加してのWSや防災訓練が重要であるが、実現するためには、本人や家族の意思によることが求められる。</li> <li>●身障者に関してはアンケート調査や訪問ヒアリング調査などを重ねていくことが重要と考えられる。</li> <li>●重度障害者や精神障害者、発達障害者に対しては、まず施設でのワークショップや訓練を実現させ、その後地域コミュニティでの実施を目指すしかないと思われる。</li> </ul>
障害者が避難できる場所の調査・計画を行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>●高齢者同様、障害者に関しても、一般の避難所で避難生活することは難しい(パニックをもちやすケースも懸念される)。障害者施設が緊急的な受け入れや指導をするケースも想定されるが、そのキャパシティは十分ではないと思われる。</li> <li>●そこで、空き家などを活用した『私設福祉避難所』の設置が不可欠と考えられる。LODEプロジェクトにおいては、高齢者同様、地域の空き家を活用して災害時の私設障害者福祉避難場所を設置する案を提案する。</li> </ul>

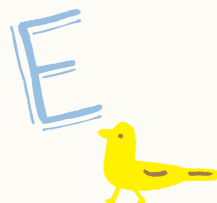


## 避難を考えるための8つの取組み目標

取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
要援護者らの抱える困難を認識・理解させる	●要支援者についての説明資料・説明パワポの利用が多少なりとも「困りごと想像力」を広げるために有効であると思われる。
避難行動時のリスクや困難を想像させる	●どのような災害が起こる可能性があるのか、その場合どのように行動するべきか等を考えてもらうメニューが必要である。 ●ワークショップや避難訓練などの実施にあたっては、毎回同じような発災想定ではなく、与件を変える工夫等が重要である。 ●クロスロードなど既存手法の活用も否定するべきではないが、一般住民向けにはやや高度すぎる懸念がある。
避難所生活のリスクや困難を想像させる	●コミュニティ自助力を上げるためには、住民の想像力を鍛えることが重要なポイントのひとつである。その中でも避難所での生活を想像しておくことは、様々な準備や心構えの役に立つ。 ●ワークショップや避難訓練などの実施にあたっては、毎回同じような発災想定ではなく、与件を変える工夫等が重要である。 ●HUGなど既存手法の活用も否定するべきではないが、一般住民向けにはやや高度すぎる(与件が厳しい)ため拒否反応を起こさないよう注意が必要である。
歴史や経験談から学ぶ	●古来からの被災の歴史や、東北や熊本の被災者の避難体験談から学ぶことは重要である。 ・大規模災害を体験し、避難生活を乗り越えた被災者たちの言葉の重さは、ワークショップ作業より遥かに重みを持つ場合がある。 ・可能な限り、実際の被災者体験談や伝聞による体験談紹介を導入することが有効と考えられる。
エトランゼ(外国人等)への対応を考える	●避難に際しては、もうひとつのE(外国人: étranger)に対する配慮も身に付けたい。 ・外国人を参加者に入れて「多言語LODEワークショップ」を開催することや避難訓練に外国人にも参加してもらうことで、コミュニティ側と外国人側双方の理解を促すことが期待される。 ●“外国人ではないエトランゼ”、発達障害を抱える子どもや障害を抱える方、認知症の高齢者の方などへの対応も考える。当然のことながらE-8の私設避難所の必要性にたどり着く場合が多いと考えられる。
避難訓練の定例化を図る	●避難に関する総合的な訓練メニューとして、避難訓練は重要である。 ●繰り返して実施することが定着につながる。
必要物資を考える・準備する	●住民の避難行動や避難生活に関する想像レベルが上がるにつれて、必要な準備物資への意識も高まってくる。 ●ワークショップや避難訓練の度に、「何を、どれだけ、誰のために、どこに必要なか」、「何を、どれだけ、誰が、どこに用意するか」を考えてもらう機会を導入したい。 ●考えるだけでなく、準備することが重要である。
私設避難所のニーズと候補を考える	●避難所生活の想像を真剣にすればするほど、要援護者の避難生活には、特別に配慮された空間や機材が必要になる場合が多いことに気がつく。そこで取り組むべきは、認知症が懸念される高齢者や、パニックになりやすい障害者などに向けた「私設の福祉避難所」づくりである。 ●発展的段階の取組みとして、私設福祉避難場所づくりをテーマとしたワークショップや調査が重要である。

## 体験をととした訓練と共有化の取組み目標

取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
みんなの前で発言する体験をしてもらう	●ワークショップや避難訓練の場では、できるだけ参加者全員がみんなの前で発言する機会をつくることが重要である。 ●自分の意思を自分の言葉で伝えることに慣れておくことは、避難行動時や避難場所として重要となる。 ●また、自分の言葉を発することは、知識や思いの定着に効果的であると思われる。
防災グッズなどの共同制作体験をしてもらう	●LODEでは、参加者が手を動かして制作したり、老若男女が楽しめる体験型イベントを導入することが効果的と思われる。 ・ほのぼのの灯り制作や灯りイベントの導入 ・高齢者三種の神器制作や福祉系イベントの導入 ・ストローハウス制作ワークショップ
まち歩きによる共同確認作業体験をしてもらう	●図面ワークショップだけでなく、実際にまちを歩き、防災や避難上の注意情報を確認していくことも、知識や意識定着のためには重要な体験メニューである。
炊出し体験(作る、食べる)をしてもらう	●避難所での炊き出しの経験(食べる経験、料理する経験)として炊き出し体験も有力なメニューである。 ●また、食の介在によって、参加者相互のコミュニケーション増進を図る効果も期待される。
防災機器等の操作・使用体験をしてもらう	●消火器、担架、簡易発電機、簡易無線機などの操作・使用も重要な体験メニューである。体験することで、参加者の“防災活動”への距離感を縮めることが期待される。また、子どもの関心をひきつける点でも有効であると思われる。
他の世代や外国人との交流を体験してもらう	●日頃コミュニケーションする機会のない相手(とりわけ視・聴覚障害者や外国人などコミュニケーションの不自由な要援護者)との意思疎通にチャレンジする機会を設けることも重要である。 ●子どもも大人にとっては意思疎通が難しい相手と言える。子どもとのコミュニケーション体験も重要である。
逃げること(緊急避難行動)を体験してもらう	●「釜石の奇跡」で有名な釜石東中学校の生徒(震災当時)によると、常日頃から何度も逃げる訓練を重ねていたとのことである。よって、図上での避難シミュレーションだけでなく、実際の避難練習を導入したい。 ●当初は避難訓練イベントでの実施が適当といえるが、本来は年間に何度も実施したいメニューである。
避難所生活の模擬体験をしてもらう	●大規模災害発災後の避難生活では、学校体育館などでの避難生活が長期にわたるケースも想定される。 ●避難所生活を模擬体験しておくことは、参加者の「食料や防災用品の準備・備蓄」意識を高めることにも繋がると思われる。 ●体育館などを借り切って、夏季や冬季にオーバーナイト滞在訓練をすることが望ましいが、その他のLODEワークショップにおいて避難所生活体験メニューを一部導入するという、比較的簡便な方法からでも着手することは可能である。





## 担い手育成の取組み目標

## 個人や各種コミュニティをつなぐための取組み目標

Tra

Co

取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
導入LODE予備LODE講習会から始める	<ul style="list-style-type: none"> <li>●市区町村域や、小学校区以上のエリアで行う“紹介・導入”的なLODE講習会を「導入LODE」として位置づける。</li> <li>●導入LODEは、育成の対象となるべきコミュニティリーダー候補や、意欲の高いコミュニティの発掘に効果があると考えられる。</li> </ul>
人材育成の核となる関係機関参画体制を作る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コミュニティリーダー（民生委員や自治会長、子ども会役員、或いはPTA役員など）と事務局（社協職員や包括支援センター職員）等から成る「防災と福祉見守りのための地域体制」の設立を目指す。</li> <li>●組織の対象エリアは、小学校区程度が適していると考えられる（それ以上広域になると、諸調整が難しくなる）。</li> <li>●小学校区をベースとした地域ぐるみ体制は、小学校（避難所になることが多い）の協力を得やすく、将来的には学校の参加の可能性も視野に入れやすい。</li> </ul>
説明・説得・行動力のある人材を見つける	<ul style="list-style-type: none"> <li>●民生委員や自治会長、子ども会役員、或いはPTA役員などが防災コミュニティリーダー候補として考えられるが、「上から目線」のリーダーでは上手く機能しない恐れがあるので注意すべきである。</li> <li>●気遣い型・心配り型のリーダーでなければ、要援護者からの信頼を得ることは容易ではない。コミュニティリーダーに相応しいベターな人材を見つける。</li> <li>●「完全なリーダー」は稀有なので、チーム化を促すことがベター。</li> </ul>
社協職員はコーディネータ役となる	<ul style="list-style-type: none"> <li>●社協職員にはコミュニティリーダーたちを支える裏方や、LODEの普及説明役としてのコーディネータ役を担ってもらうことが適していると思われる。</li> <li>●「大規模災害発生時に向けた防災コミュニティ力」だけでなく「平時の福祉コミュニティの見守り力」という福祉面からの説得力を持つ立場は、要援護者の災害時支援においては不可欠といえる。</li> <li>●普段の仕事柄、地域のコミュニティリーダー層や要援護者等の情報に明るい人材も多く、LODEのコーディネータとして、非常に有望と目される。</li> </ul>
講師・ファシリテータ役をしてもらう	<ul style="list-style-type: none"> <li>●WSや防災訓練の講師役、ファシリテータ役、本部役員役などを経験することで徐々に力が定着していく。</li> <li>●この訓練は、コミュニティリーダー向けである。</li> </ul>
自分たちでWSの企画と運営を行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>●図面WSだけでなく、まち歩きや避難訓練などを自分たちの力で企画・運営することで、能力がアップする。</li> </ul>
普及者育成支援ツールを活用する	<p>LODE普及ファシリテータ育成に向けて開発したこの育成支援ツールは、子ども(L)、高齢者(O)、障害者(D)、避難(E)、体験(Ex)、育成(Tra)、協働・繋ぎ(Co)、図面WS(Map)という8つの視点から、目指すべき目標や実施メニュー案や実施において留意すべきことなどを整理したものである。このツールは、様々なコミュニティにおいて、その特性に応じながら活用出来る内容のものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●対象コミュニティの状況や防災活動のレベルを評価するためのチェックリストとして活用。</li> <li>●対象コミュニティに不足している活動や、今後の重点活動課題を明らかにするために活用。</li> <li>●DIGやHUG、クロスロードなど、これまでの既存手法を否定するのではなく、それらを取り込みながら、より多角的な視点からコミュニティ自働力の強化に取り組むことも可能である。</li> <li>●このチャートを地域ニーズに合わせて自分たちで改定する力が育つことが育成の目標となる。</li> </ul>
普及者候補にはLODEを他者に伝えてもらう	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人材育成の最終目標は、「LODEを他者に伝える・教える」である。</li> <li>●他地区へ講師として招聘されたり、或いは手法のさらなる改良のための検討に参加するレベルを想定している。</li> <li>●単に図面WSのファシリテータができるだけでなく、WS企画のプランナーや、要援護者たちをお世話できるコーディネータレベルを目指す。</li> </ul>

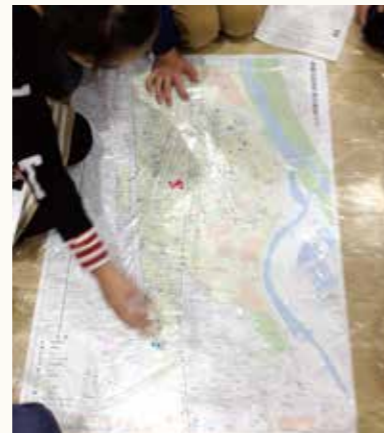
取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
つなぎの軸・核となる体制を作る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●小学校区において、各自治組織リーダー、各地域防災組織リーダー、各地域まちづくり組織リーダー、民生委員、地域包括、社会福祉協議会（主として事務局役）等による協力推進体制の構築体制づくりが望ましい。</li> <li>●行政側が協力的な場合には、行政担当部局からの参加も働きかける。</li> </ul>
WSや訓練の場で参加者同士をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●WSや避難訓練などでの最大の目的のひとつは、参加住民相互コミュニケーションの増進である。どのように情報を得ようが、コミュニケーションの少ないコミュニティでは情報を生かせない。</li> <li>●WSでの会話だけでなく、握手会や食事会などの方策も活用する。</li> <li>●最終的な目標は「疑似家族関係をどれだけ構築できるか」である。</li> <li>・LODE図面ワークショップにおいて、要援護者情報だけでなく「支援者と成り得る人」や「小・中学生、高校生」などの情報を収集する必要があるのは、「地域は私の大家族」的眼差しを参加者に意識してもらうためである。</li> <li>●つなぐためには、会食会や握手会なども有効な手段である。</li> <li>・福祉や住民参加まちづくりでは当たり前の鉄則であるが、食を共にするとコミュニケーションの度合いが深まる。</li> </ul>
要援護者と地域住民をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「繋ぐ」という点で、最大の課題は、地域コミュニティと要援護者をどう繋ぐかである。図面WSである程度の要援護者情報は収集できても、その要援護者の方々に「地域コミュニティを信頼して要援護の意思を表明してもらう」ことができない限り、マップ情報は有効に活用されない恐れがある。</li> <li>●要援護者が自治会等の地域コミュニティに参加するケースは多くない。この方々が地域に期待してくれたり、信頼をおくようになるならば、LODEはそのミッションの大半をなし遂げていると思われる。</li> <li>●この課題をクリアするための得策は無いと思われる。地道な活動と呼びかけの継続が重要である。</li> </ul>
エリアをつなぐ(小学校区での合同WS)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●小学校区を基本としたエリアにおいて、様々な地域内コミュニティ組織(単位自治会、連合自治会、老人会、婦人会、子ども会、PTAなど)が一堂に参加する合同WSを実施したい。</li> <li>●この合同WSは、エリア・規模の異なる学校区内の各組織同士(参加者同士)を結びつける有力な機会となり得る。</li> </ul>
世代をつなぐ(大人と子供、中高年と若い大人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自治会などでのLODEワークショップに最も参加しない層としては、若者と並び子どもの親世代の住民があげられる。こうした子どもの親世代(主として30代～40代)の参加を促すために、PTAでのLODEワークショップ開催を呼びかけることが有効であると思われる。</li> <li>●その際、親だけで取り組むワークショップよりは、親子でも参加できる内容のものが、より効果的と思われる。地域への関心は薄くても我が子には関心を持つ親が多いと思われるからである。</li> <li>●さらに、子どもとPTAだけの取り組みに終わらせることなく、それを基本コミュニティ(自治会)でのWSなどにつなげていくことが必要。</li> </ul>
地域の事業者と住民をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地域には住宅以外に店舗や工場、医療機関、福祉施設多様な事業所が存在する。また、空家の所有者もこれに準じるものと言える(不動産所有者として)。地域に存在する人的資源、物的資源を防災活動に活かすという点から、事業所を地域とつなぐことも重要である(店舗や工場、小規模な医療機関、介護事業者、不動産所有者)。</li> </ul>
井戸端サロン型活動をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●要援護者の中でも、地域活動に顔をみせる機会が少ない在宅介護・要支援高齢者、“介護予備軍”の高齢者、或いは在宅障害者等の情報はなかなか得られない。こうした要援護者の情報を入手し、それらの方々に対し地域側からの働きかけを行っていくためには、インフォーマルで柔らかな、女性の能力をいかした情報収集や活動の場(昔の井戸端や縁側の機能を持つ場)が有効であると思われる。</li> <li>●お茶飲みサロンや創作活動サロンなどを「井戸端LODE」として活用したい。</li> </ul>
物資備蓄や私設避難所づくりをとおしてつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●伊丹市のマンションLODEワークショップにおいて、「ガスカセット発電機をマンション自治会で購入し、ガスカセットを全住戸が1～2本ずつ購入・備蓄しておく」や「マンション住民だけでなく、近隣の障害者や高齢者に被災時発電機の利用を呼びかけてニーズを引き出す」という案が提案された。</li> <li>●このように物資備蓄などの機会を通して住民や要援護者と自治組織を繋ぐという方法も一考に価すると思われる。</li> <li>●障害者や高齢者のための私設避難所づくりでは、要援護者家族と地域自治組織、さらには空家・空施設の所有者等をつなぐことが不可欠となる。</li> </ul>



## 図上ワークショップでの取組み目標



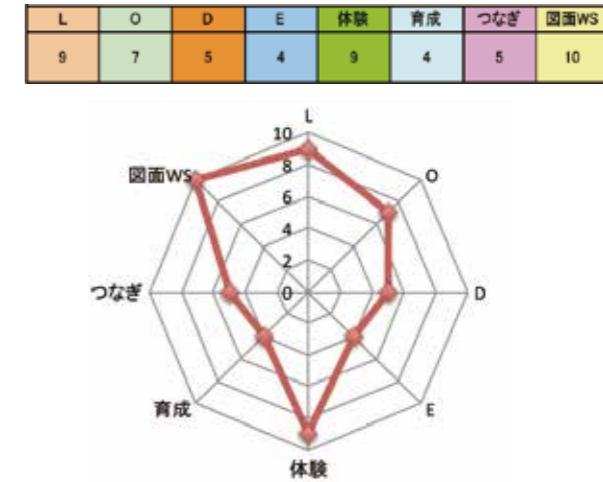
取組み目標・ポイント	説明・具体的な方法・留意点など
要援護者・支援者情報収集	●第一の目標である。要援護者情報だけでなく支援者候補を浮き上がらせることが目標となる(それが出ないとコミュニティ自助力にならない)
要援護者への認識を深めるための学習をする	●要支援者についての説明資料・説明パワポを利用する。
作業班内における会話促進の工夫をする	●要援護者情報の収集と並ぶ最大の目標は「コミュニケーションできる人的関係作り」である。 ●テーブルを囲む方式、壁掛け図の前に集まる方式、どちらが適しているかを企画で話し合う。
基本単位は単位自治会で行う	●基本単位は民生委員が1名程度が考えられる(200世帯~500世帯前後)=単位町内会レベルでの実施が基本となる。
地区や目的に合わせた図面使用	●戸建て中心地区は平面の住宅地図 ●マンションは立面戸割図 ●戸建て・中高層混在地区は、両方の併用 ●育成LODE研修会では「仮想のマンションコミュニティ」の立面戸割図
凡例は状況に応じて工夫する	●基本は、コミュニティの都合・事情に応じて、自分たちが使いやすく決めること。 ●初めて取り組む場合のためには、「標準モデル」を活用する。 ●要援護者と支援者の存在を見つけやすい、認識しやすいように決める。 ●色盲・色弱の住民に配慮する
個人情報の管理に留意する	●個人情報の取り扱いを問題視する住民の存在に注意しなければならない。そのために、次のような方法を講じることを検討すべきである。 ・作業して得られた情報は民生委員や自治会役員などが管理する。 ・アンケート調査や訪問ヒアリング調査などで「災害時避難の目的に限って、個人情報の管理を自治会や民生委員に委ねる」という意思確認を行う。 ・情報を管理する立場の者は、個人情報取り扱いに関する研修を受講する。
コミュニティ力を養うためWSの定例化を図る	●情報更新だけでなく、コミュニケーションできる関係を維持・構築するためにも、年に1回程度以上のWSを実施することが望まれる。



## LODESTARチャートの活用例

### (1) コミュニティカのチェックリストとしての活用例

・LODE STARチャートの64の小目標それぞれについて、現在どのくらいのレベルで取組んでいるかについて点数をつけます(3点:非常に高いレベル~0点:全く着手できていないまで)。  
・中目標(8カテゴリー)ごとに点数を集計して、それらをレーダーチャートに図示します。  
・そうすると、そのコミュニティで弱い分野が客観的に見えてきます。



### (2) 重点目標の抽出と達成方法の立案への活用例

・自治会が主催する防災ワークショップに子どもや子どもを抱える世帯の参加が低いことを課題と考えた地区が、子ども自信や子どものいる世帯の参加を促そうということを当面重点目標に掲げた。とします。  
・そこでLODESTARチャートの中の「繋ぎ・協働」のカテゴリーの中から「世代をつなぐ(大人と子ども)」という項目に着目します。  
・次に「世代をつなぐ(大人と子ども)」という小目標を真ん中に据えて、それを達成するための手段(細目標)をみんなで検討していきます。  
・その検討の中から、「まずは学校に協力を打診してみよう」とか、「学校が難しいならPTAに防災に協力してくれないか要請してみよう」、「いや、PTAも多くは形骸化しているから子供会にアプローチしてみよう」、さらには「学習塾にチラシを配ってもらえないか頼んでみよう」等々の行動案が提案されるはず。と。  
・それらを実行していくことがさらなる地域力の強化につながるはず。と。

世代をつなぐ(大人と子ども)	WSや図録の場で参加者同士をつなぐ	非戸籍サロン型活動でつなぐ
エリアをつなぐ(小学校区で)	<b>繋ぎ協働</b>	物資備蓄や私設避難所づくりをとおしてつなぐ
つながりの軸・核となる体制を作る	要援護者と地域住民をつなぐ	地域の事業者と住民をつなぐ

学校に協力を打診	連合町内会やまちづくり協議会への応援要請	PTAに協力要請
まずは子どもだけの防災学習イベントを	世代をつなぐ(大人と子ども)	子どもに魅力に感じてもらう仕掛けと分かりやすさの工夫が必要
学習塾にチラシ配布を依頼	子ども向けイベントに来た子どもと家族に自治会防災に参加してもらえよう依頼	子供会にアプローチ